邦人向“海外不動産投資ファンド”の創始者のリスク選好

―紐育土地建物社長･岡本米蔵の前半生―

小　川　　功

はじめに

戦前期におけるハイリスク業種の例としては鉱業，海運，投資銀行業，証券・米穀仲買業，土地会社，リゾート開発，遠隔地での広大な山林業，牧場，競馬場経営などが想定される。筆者はこうしたハイリスク分野における企業家・投資家等の事例を収集し，順次公表しつつある。[1)]本稿ではその典型的事例として大正初期の米国大都会近郊の荒蕪地先行取得を目的とする一種の「海外不動産投資ファンド」を主宰し，一部では「海外雄飛の模範的青年」，「大実業家である許りでなく，不世出の偉人」[2)]などと賞賛される一方，高柳淳之助，松島肇[3)]らともども「虚業家」「一種のインチキ師」[4)]とも酷評された毀誉褒貶の定まらぬ特異

1）拙稿「証券業者による鉱山経営とリスク管理－八溝金山事件を中心として－」『彦根論叢』第354号，2005年５月，同「鉱業投資とリスク管理（序説）－鉱業リスクの諸態様を中心として－」『彦根論叢』第355号，2005年９月，参照。

2）峰間信吉編『海外雄飛の模範的青年　岡本米蔵』大正５年４月，大正教育社，山本慶治『感謝と思い出　創業三十年を回顧して』昭和29年，培風館,p８

3）高柳淳之助は拙稿「“虚業家”高柳淳之助による似非・企業再生ファンドの挫折－ハイ・リスクの池上電気鉄道への大衆資金誘導システムを中心に－」『滋賀大学経済学部研究年報』第11巻，平成16年12月，同「“虚業家”集団『高柳王国』の形成と崩壊－大衆資金のハイ・リスク分野への誘導と収奪－」『彦根論叢』第351号，平成16年11月，松島肇は拙著『「虚業家」による泡沫会社乱造・自己破綻と株主リスク－大正期“会社魔”松島肇の事例を中心に－』滋賀大学経済学部研究叢書第42号，平成18年３月参照。

4）村上順二編『野村得庵』昭和26年，本伝上,p371。野村徳七は晩年に家史「蔦葛（つたかづら）」執筆を志し，野村「同族会の植村主事や小笹執事などを使」（得庵下,p520）い，昭和14年２月から「数年に亘って之を続け」（得庵下,p520），野村合名社内の総合雑誌『倭』昭和14年11月号から18年11月号まで24回掲載した。『野村得庵』編者は「紐育から何十哩とか離れた荒蕪地帯を買収」（同書,p372)する岡本のプランを「荒唐夢の如き事業計画」（同書,p372)と評している。岡本の仲間だった山本慶治も「事業が遠い外国との関係であるから，誤解もあり批難も多」（山本前掲書,p12）かったと回顧している。野村財閥は三島康雄『日本財閥経営史　阪神財閥－野村・山口・川崎』昭和↗

な人物を取り上げたい。大正期の日本国内の土地会社への株式投資だけでも十分にハイリスク分野への投資の条件を満たしているが，当該ファンドは「紐育市内外に於て地所を購入し，適当の時期に於て之を売却」（T6.3.22読売）するものであった。しかも当初は構想として当該「所有地所を担保として低利の外資を輸入し，金融業を営むこと」（T6.3.22読売）をも別働隊の設立目的に掲げており，海外不動産投資と国際金融業を併せ営む一種の投資銀行業を志向したものと解される。

大正初期にかかる国際金融業務を単に夢想するだけでも進歩的・革新的な試みだと評価することもできようが，本事例は現実に一部不動産開発に着手し，投資シンジケートを多数口組成し，数多くの日本人に当該ファンドを購入させた実績を確認することができる。しかも購入層は一部の富裕階層でも，無謀な投機筋でもなく，概して教育水準が高く，それぞれの地域社会で尊敬の対象になっていたであろう中流以下の知的労働者が大半を占めていたと考えられる。一般には常識やリスク管理能力が相当程度備わっていると思われる，いわゆる「知識層」が何故に，こうしたハイリスク分野にやすやすと誘導されたのかという，リスク受容過程が筆者にとって最大の疑問として浮かび上がる。

そこで本稿では一連の海外投資リスク分析のまず第一段階として，当該「海外不動産投資ファンド」を主宰した破天荒な人物の出自・経歴・職歴等，前半生の分析から開始し，岡本米蔵が提供しようとしたハイリスク商品受容の態様に関して一部の富裕階層において生じた明確な差異を取り上げたい。そして今後当該ファンドの内容，具体的な投資家の分析，リスク受容の態様，岡本米蔵と教団との関係などに順次及んでいく予定[5]である。国際的な海外不動産投資とい

↘59年，日本経済新聞社参照。また野村徳七の危機管理については平成16年8月2日経営史学会関西部会大会・夏期シンポジウム（於大阪市立大学国際交流センター）における三島康雄氏の報告「財閥化の成功と失敗―野村・川崎の創業者とリスク―」に負うところが大きい。なお「虚業家」に関しては拙稿「『企業家』と『虚業家』の境界―岩下清周のリスク選好度を例として―」『彦根論叢』第342号，平成15年6月，同「企業家と虚業家」『企業家研究』第2号，企業家研究フォーラム，平成17年6月，参照。

5）当面拙稿「ハイリスクの海外不動産投資ファンドの国内販売戦略―大正期紐育土地建物会社のビジネス・モデルの虚構―」，同「地方小資産家の海外投資リスク受容の態様―大正期『紐育地主名簿』を素材として―（仮題）」など一連の姉妹編の執筆を↗

う事例の性格上，近い将来における必要な現地調査活動や海外との共同研究等をも視野に入れているが，時局の諸制約の中で当面はまず国内資料に基づく事前調査，予備調査として位置付けることとしたい。

本稿は滋賀大学リスク研究センターの金融リスク等に関する共同研究プロジェクト成果の一部を構成する。紙面の制約上，本稿および今後の予定稿では頻出資料を略号で本文中に示した。[6)]

Ⅰ．岡本米蔵の青年期

岡本米蔵は「行商学生第一号」[7)]，「海外雄飛の模範的青年」「弱冠にして米国に渡り，自労自活，克く艱と闘ひ，努力，遂に今日の成功を贏ち得たる人」（箪笥，巻末広告）とか「在米同胞中の成功者を以て目せらる」（国民新聞書評），

↘『彦根論叢』第358号以下に予定している。

6）（岡本米蔵関係の著作類）七十…岡本米蔵『商工界の七十日』明治35年／地所…岡本米蔵『紐育市内外の地所』明治45年／再版…岡本米蔵『紐育市内外乃地所』大正５年１月／牛…岡本米蔵著『牛』（初版）大正４年，博文館，東京，『牛』（復刻版），昭和48年，霞ヶ関書房（引用の頁数は復刻版による）／箪笥…岡本米蔵著『箪笥』大正６年６月，博文館，東京／米蔵…峰間信吉編『海外雄飛の模範的青年　岡本米蔵』大正５年４月，大正教育社／往く…岡本米蔵述『我か往く処』大正８年４月，培風館，東京／感謝…山本慶治『感謝と思い出　創業三十年を回顧して』昭和29年，培風館，東京／洋行…岡本米蔵著『株式会社岡本洋行趣意書』大正８年12月，培風館，東京／名簿…『紐育地主名簿』紐育土地建物株式会社，大正４年９月，旧「京都産院文庫蔵書(Dr.Saiki's Library)」，紐育市／安出…岡本安出「『牛』再版について序文」『牛』（復刻版），昭和48年，霞ヶ関書房

（新聞・雑誌）読売…『読売新聞』，東日…『東京日日新聞』，東朝…　『東京朝日新聞』，大毎…『大阪毎日新聞』，大朝…『大阪朝日新聞』，萬…『萬朝報』，内報…『帝国興信所内報』

（紳士録・会社録）紳…『日本紳士録』，諸…商業興信所『日本全国諸会社役員録』，要録…東京興信所『銀行会社要録』，帝…帝国興信所『帝国銀行会社要録』，商工…『日本全国商工人名録』，商信…東京興信所『商工信用録』，帝信…『帝国信用録』，株要…『全国株主要覧』，重…『大日本重役大観』大正８年，全株…『全国株主年鑑』大正15年用，丸…『丸之内紳士録』丸之内新聞社，昭和６年版，衆…『大衆人事録　第十版』昭和９年,p187

（その他）日本…『紐育の日本』明治41年，発展…『紐育日本人発展史』大正10年，蔦葛…野村得庵「蔦葛（つたかづら）」『倭』野村合名，昭和14年11月号～18年11月号連載／得庵…村上順二編『野村得庵』昭和26年，本伝上，平山…平山亮太郎「証券情報の草分け」『相場今昔物語』日本経済新聞社，昭和27年

7）小沢信男「行商学生第一号　岡本米蔵のこと」『思想の科学』（第五次）思想の科学社，昭和41年６月

「貧児より身を起し，今日は紐育土地建物株式会社の社長たる奮闘努力の人」（大阪毎日新聞書評）などと肯定的に評価されている資料が少なくない。また読書界では『牛』，『箪笥』等の著者として相応の足跡を残したのも事実である。近年でも三善貞司氏の編纂した『大阪人名辞典』では岡本米蔵は「ニューヨークで不動産会社を設立した傑物」[8)]として紹介されている。しかし反面で高官・有力者等に取り入る術が巧みな岡本米蔵には毀誉褒貶が定まらない側面があったことは，岡本自身が「爾来八年，官権の乱用，同胞の迫害，財閥の狡計，識者の誤解，有らゆる障害に遭遇」（洋行，巻末）し，「余は四面楚歌声裡に，単り孤城を守」（洋行,p18）ったと回顧しているように，「＜岡本＞君の此事業には，大分妨害を受けた。外人よりは寧ろ同胞から迫害やら中傷やらを受けた」（米蔵,p65）ことからもうかがえる。

大阪の不動産業界の先駆者の一人である佃順蔵は岡本の著書『牛』を愛読し，その一節「商いは人の欲せざるを欲し，人の欲するを待って商うべし」を読んで，敗戦直前の焼け野原の大阪市内の土地を一手に買い占めて，戦後の値上がりで巨利を得たといわれ[9)]，佃ほどの不動産業界の先駆者にも多大な影響を与えるなど，評価の是非は別として少なくとも不動産史上には欠かせない人物であったことは間違いない。

岡本米蔵は明治14年４月「播州の山奥」（往く,p18），「山奥の農家」（箪笥,p３），すなわち「東条川の翠渓に浜する一寒村」（牛,p３)兵庫県加東郡上東条村（米蔵,p89）の「貧しき，百姓の悴」（牛,p３)谷杉松の長男に生まれた。（衆,p187)岡本自身が「わが最愛の弟三次郎」（七十,p143)とする実弟の谷三次郎[10)]は昭和10年時点で岡本洋行取締役に在任していた。（諸S10上p67）同年には岡本の「竹馬の友」（感謝,p８)で，「郷里の小学校の同級生」（感謝,p７)，大正５年

8）9）三善貞司編『大阪人名辞典』平成12年,p732

10）岡本自身「私の父は，三人の男子を寺に遣り…其の内，智光と称して居たのが，只今そこに参って居ます」（往く,p128)とあり，自身も真言宗の寺に「弟に代って…私が引受けまする」（往く,p125)と出家した経験を有する。大正12年の震災後「兄サンを援けて後をやることになった」（感謝,p29）「岡本君の弟」（感謝,p29）の谷三治郎（東京市大森区南千束，東京瓦斯電気工業取締役）は岡本洋行常務として同社の「復興の面に主力を用いた」（感謝,p30）

に紐育土地建物に入社して事業上のパートナーとなる山本慶治[11]も兵庫県に生れた。

16歳の春までは「村の小学校に通ふ片手間に…夜は家に村童を集めて一小塾を開き」（牛,p３），「人を教ふる教育家たらんと欲するに…境遇のまにまに…己れの希望を棄てて，端なくも物質界に入れり…竟に俗物と化せんと…十露盤弾くに急がはしき身」（牛,p４～５)となったと書いている。明治29年４月４日「望まるるまま神戸の伯父」（米蔵,p89）先代・岡本市蔵[12]の養子（衆,p187)となる時に，伯父からの借金である「金四百万円也。右谷甲家借金分配方承諾候」（米蔵,p46）と実家の借金を背負って，明治30年春16才の時「播磨の在から徒歩のわらじばきで山越え谷越えはるばると」（安出,p20)，「神戸に出て始めて，船といふものを見た」（往く,p18）とする。

明治32年神戸商業学校の生徒であった18才の時山陽，西海，東海，東山，北海の各道，上海，杭州，蘇州を行商した体験をもとに『修学行商日記』を書き，自費出版した。『大阪朝日新聞』（6640号），『神戸新聞』（873号），『横浜貿易新聞』（3248号），『日本新聞』（3942号）などに書評が掲載された。同書は後年に「紐育事情研究会」[13]から再版された。（箪笥巻末広告欄）

明治34年神戸商業学校を卒業し，東京高等商業学校本科に入学，１年に在学中に学資を得るため学用品の行商を思い立ち，関東，関西，東北，北海，北陸の各地の「知名の人士，工場，商店等を訪づれ，其探研せし実況」をもとに『商工界の七十日』を書き，三千部を自費出版した。副島種臣から同書の題字，樺

11）山本慶治は明治14年生れ，東京高等師範研究科卒，東京高師勤務を経て奈良女子高等師範学校教諭の時，「岡本米蔵君が小学校時代の竹馬の友にして，先頃大阪の出張所にて，十九年振に邂逅」（米蔵,p112)したことを契機として大正５年４月紐育土地建物入社（感謝,p10），岡本洋行の整理に奔走後，大正13年12月培風館を「独力創業」（感謝,p31）した。昭和29年培風館より『感謝と思い出　創業三十年を回顧して』を刊行後，昭和38年死亡（鈴木徹造『出版人物事典』出版ニュース社，1996年，やp308）。

12）先代・岡本市蔵は「神戸の…西本願寺の説教所…の主事」で，「借金の返済のかわりに兵庫県の山奥の村から」「自分の甥に当る十六才の青年を養子に迎えた」（安出,p４)たとされる。

13）「紐育事情研究会」の所在地は兵庫県武庫郡西郷町大石（大正４年９月調の『紐育地主名簿』での岡本の住所に一致），後に大阪市東区高麗橋の三井銀行楼上に移転したが，いずれも同所に滞在した岡本自身が主宰した組織と思われる。『商工界の七十日』も後年に同研究会から再版した。（箪笥巻末広告）

山資英[14]から「余の岡本米蔵生を知ること茲に二年，其の活発の精神に富み，才気の横溢せることは学生間に罕に見る所…世上幾多青年輩に好模範を示すもの」（七十，序）との序文を貰うなど，既に名士との関係構築に特異な才覚を発揮しつつあった。70日間の彼の行商の一例を示すと，たとえば仙台では明治39年「サンパウロ市に日本商店を開」[15]くほど海外進出熱のある呉服店主の藤崎三郎助を訪問して「織工場縦覧所望せしに…氏は頻りにビールを勧めつつ」（七十,p50）意気投合するといった具合である。北越では内藤日本石油，三島蔵王石油両社長に面会し多大の影響を受け，三島社長からは石油業界は「冒険的にして斯業ほど多くの資本と胆力と，且つ忍耐とを要する業は他にあらじ」（七十,p105）と説かれている。「米沢は大々的保守的にして工業など一向振はぬ」との米沢実業青年会員の嘆きに岡本は「刷新せんとならばおもい切りて金を出し，該業に関し新空気を吸ふたる人物を得るのが一番得策なるべしと大風呂敷ひろげぬ」（七十,p39）と記している。この「該業に関し新空気を吸ふ」ということが，この時期の岡本自身の目標でもあったようだ。

明治37年に東京高等商業学校卒業後，川崎造船所副社長川崎芳太郎[16]が母校の神戸商業学校の名誉校長であった縁で「二十五円の月俸で神戸川崎造船所に入った。米国行の旅費を得ん為である」（米蔵,p27）が，永年勤続してもとても足りないことが判明，そこで泣き落としの一策を講じて神戸時代から知遇を得ていた「川崎芳太郎氏より君が始めて渡米せんとする時贈られた」（米蔵,p101）千円で渡米した。岡本は「私が紐育へ参ったのは，明治三十七年，二十四歳の秋であります。嚢中殆んど無一物で，世界の大都の真中に抛出された」（往く,p38），「初めて米国に行って，米国貿易会社に勤めました時，二百名許の白人の中へ，唯一人交った」（往く,p77）と書いている。無一物の岡本が「米国に渡航」（衆,p187）後，米国貿易会社すなわち「亜米利加貿易会社に入社，機械輸出主任に累

14）岡本は「番町の樺山様」（七十,p147)と親愛を込めて呼ぶ伯爵・樺山資英（文相，満鉄理事）は後に日米興業賛成人（T6.3.22読売）にも名を連ねた。
15）入江寅次『邦人海外発展史』下巻，昭和17年，巻末年表,p5
16）川崎芳太郎とは東京高等商業学校在学中の明治34年9月13日にも「川崎造船所に川崎副社長を訪ひ」（七十,p146)，行商旅行終了のあいさつを行なっている。

進」（衆,p187）するまでの経緯は強烈な自己宣伝の一語に尽きる。勤務先となった亜米利加貿易会社は「日本を初め，支那，南米，中米及墨西哥，豪州，南亜，東印度，英，独，露，比嶋等に支店を設置」（日本,p21）する世界最大級の貿易会社で，ニューヨークのブロードウェー25番地に所在する本店には「二百名の店員を有し，之を各部に配置して輸出入貿易の事務を担任せしめ」（日本,p21）ていた。同社スタッフとしては「会計主任はウヰリアム・エッチ・スチーブンス氏にして，日本支那部の支配人はエス・エッチ・ケ子ジー氏なり，而して目下の紐育の本店には日本人として葛原猪平，岡本米蔵両氏ありて事務に忠実の聞えあり」（日本,p21）と紹介されている。東京高商の同窓で，岡本の同僚（明治36～42年）の葛原猪平は明治33年東京高商を中退して農商務省実習練習生として渡米[17]，「ペンシルバニア大学，ウィスコンシン大学に入りて，専ら経済学を修む。修業後，偶々米国貿易会社々長モース[18]の知遇を得て，同三十六年同社紐育本店勤務となり，漸次重用せらるるに及び，同国諸事業の研究を積みて，夙に製氷冷蔵事業の有望なるを知る。同四十二年同社を辞して帰朝し葛原商会を興して製氷並びに冷蔵機械の輸入及び其の設計工事に当」[19]った。明治37～39年に日米週報の星一[20]，米国貿易会社の葛原猪平[21]，岡本米蔵の３人はＮＹに駐在，相互に交流の可能性があり，岡本は葛原の独立に刺激を受けた可能性もあろう。

Ⅱ．株式市場へ転進と紐育土地建物の設立

岡本は「嘗て仲買として二年半，紐育株式市場裡に在り」（箪笥,p143），投機界でも玄人であると自慢している。すなわち明治41年岡本は米国貿易会社入社「四

17）19）野依秀市編『明治大正史』第14巻，人物編，昭和５年，思文閣出版,p13

18）モースは「米国亜細亜協会の会頭として且つ又日米貿易の開祖者として其手腕其識見当代の雄なり」（日本,p21）と称されたジェムス・アール・モールス亜米利加貿易会社社長のことである。同社は明治41年時点ですでに「過去三十年間日米貿易に従事」（日本,p21）していた。

20）星一は明治27年に渡米し，33年12月８日「星一，福富正利二氏相謀りて，日米週報（Japanese American Commercial Weekly）なる週刊新聞を発刊」（発展,p409），39年星は10年余の米国生活後に帰国した。

21）帰国後の葛原猪平は拙稿「藤本ビルブローカー銀行のベンチャー企業関与とリスク管理－葛原冷蔵の破綻事例を中心として－」『地方金融史研究』第34号，平成15年３月参照。

年目に同社を辞して，紐育のウォールスツリイトに於て，公債株式の売買に従事」（往く,p78）し，「ウォールスツリイトを楽屋より見た」（箪笥,p149)結果，「公債株式の売買を掌り…端なくも相場必勝の秘訣を発見」（洋行,p27)したとする。おそらくウォール街のポスト・エンド・フラッグなど「紐育取引所の株式店に出入りして，邦人の註文などを取次」（得庵,p371)いでいた。前職場で日本輸出掛の助手として岡本と働いたチャールスは「貿易会社に居て安楽に，世を送るよりも，屍を共に荒野に曝したい」（往く,p80）と証券界への同行を願い出たという。

明治41年３月15日から８月10日にかけて「日本に於ける海外大旅行団の嚆矢」（発展,p614)である朝日新聞社主催の世界一週会の視察団として53名（北浜から高倉藤平，野村徳七，梅原亀七ら）の一行がニューヨークを訪れた。４月19日以降28日まで市内のビクトリア座，ホテル・アスター，市内の名所旧跡等を視察をした。野村徳七らが「親しく紐育の地を踏んで」（平山,p167)株式取引所，仲買店ポスト・エンド・フラッグ調査部を視察をした際に，「米国でそのころ非常に名を知られていた岡本米蔵という人が親切に案内してくれ，世話になって帰ってきました」（平山,p167)との証言がある。[22] 取引所訪問を唯一の目標にしていた野村は「余り張切ったこの日の見聞は興奮を覚えて眠られず」（得庵,p201)と語ったほど大感激した。またポスト・エンド・フラッグの調査部が精緻な統計を作成する完全な機能を実査した体験を「生まれて以来これほど驚いたことはない」（得庵,p244)と告白している。さらに堂島の公会堂寄付で有名な「株界の寵児」[23] 岩本栄之助が遅れて渡米した際にも岡本は，「如才なく立ち回ったらしく，岩本君は岡本を非常に信用」（蔦葛５-19）したという。

22）『紐育日本人発展史』では３月18日横浜を出港，７月18日敦賀港到着となっている。高倉藤平の参加した世界一週会の参考資料としては高倉藤平編『欧米の取引所－漫遊みやげ－』明治41年，81頁，高倉藤平発行。なお岡本安出によれば岡本は「井上準之助氏にたのまれて…ウォール街の株式取引所見学の世話をしたことがあった。この機会に株式相場の表示機を日本にも導入」（安出,p７)するに貢献したとされる。

23）24）松永定一『北浜盛衰記』昭和34年，東洋経済新報社,p78。岩本栄之助は明治41年８月19日横浜を出港した渡米実業団（発展,p566）に渋沢栄一，土居通夫，大井卜新，中橋徳五郎，松方幸次郎らとともに参加している。

岡本自身は「紐育市の平面的発展に，一路の光明を認め，爾来研究八年有余半，齢，極端に若き紐育市の郊外に，千載一遇の機会を発見」（洋行,p16)し，「太平洋を幾度となく渡り」（往く,p18）往復の船上で我が身を「己れの額に汗して『パン』を得るに忙がはしき身，素より筆執る柄にも非ず，閑も無く」（地所，緒言）と述べている。後に岡本は「紐育市内外の地所の将来に着目して…或は富豪に説」（T6.3.22読売）いたと声明する通り，明治43年秋一時帰国した岡本は大阪に野村，岩本両人を訪ね，ニューヨーク「郊外十マイル以内のところに，安い土地があるので，その土地を買って土地会社を興したいから，出資してくれないか」（平山,p168)と依頼した。この時「品性高潔，あまりにも気前がよすぎ，また体面意識もつよすぎた」[24]岩本は「情にもろいですから承諾」（平山,p168)したものの，後々当該土地会社の件で「岩本さんは非常な迷惑を受け」（平山,p168)たとされる。岡本の案内で調査部拡充のヒントを得た野村であったが，しかし情には流されず，同計画には賛同しなかった。わずか10日余り滞在しただけの野村は，「ニューヨークは岩の上に立っている街だから，上に発展する街で横にひろがる街ではない」（平山,p168)と看破し，「岡本君の目標としてゐる土地は，大阪を紐育とすれば大津辺に当るので…紐育市が急激なる発展をなすものとしても，それは余りに隔り過ぎる」（蔦葛5-19）と断然拒絶した。あくまで冷徹な野村の拒絶理由を不動産鑑定評価の用語で言い換えると，岡本が熟成度が相応の宅地見込地だと称して持ち込んだ「荒蕪地帯」（得庵,p372)の物件に対して，野村は都心からの距離，低湿地等の個別的要因をも勘案して宅地見込地への転換速度は遅く，熟成度が極端に低い素地（農地，山林）に過ぎないと判断したことになる。そしてハドソン河底トンネル[25]の近々の完成等を夢想して，早急な転換を冒険的に期待する岡本の行為を排除すべき「投機」と見做したからこそ，わざわざ岡本にこんな「土地の商売は止めろと再三忠告」（蔦葛5-19）したのであろう。この点に関する岡本側の当時の資料では「之をしも投機なり

25）ハドソン河底トンネルに関して岡本米蔵は大正8年にもニューヨークとニュージャージー両州を直結する国家的プロジェクトとして断面図入りで詳細に解説するなど，当該物件にとっての最大の材料とみなしている。（洋行，p21）

と非難する人あらば投機ならざる事業夫れ何処にか有る」（米蔵,p87）とし，後年岡本安出も「当時の人達…日本内地の土地さえ購入できぬ人たちにとってはアメリカの土地を所有しているときいただけでも山師臭いと勘ぐるほど心も視野も狭かった」（安出,p15)と夫を弁護する。

リスク管理に甘い岩本や，同様な藤田家（後述）に対して，岡本からの甘い誘いをキッパリ刎ね除けた相場師野村のしぶとさ，「所謂要慎堅固」（得庵,p373）ぶりを示す挿話であろう。

しかし不思議なことに，そんな野村も岡本を意外なほど厚遇し，「岡本の在阪中の如きも，三日にあけず彼を引見して，いろいろの面倒を見て」（得庵,p373),帰国に際して「秋琴亭で，同人の送別宴を催」（蔦葛 5-19）してやっている。『野村得庵』の編者は「岡本といふ人間の人柄に，かういふ人物に共通する魅力があり，＜野村＞氏は知らず知らずそれに引摺られたものであらう」（得庵,p373）と推測している。筆者も自叙伝「蔦葛」の大半が証券業務とは無縁の南洋旅行記に充てられていることから察するに，海外雄飛願望という面では「南洋狂」野村は内心では岡本に共鳴・同調する部分も少なくなかったのではなかろうかと推測している。

「竹馬の友」山本慶治の場合を比較してみると，20年ぶりで「謂われない魅力と威力を持って居る」（感謝,p８）岡本に再会して聞かされた「遠大な抱負と愛国の至誠には，全く感激措く能わずの感じがした。私は立ちどころに紐育土地会社入社の希望を述べ」（感謝,p８）るまで僅かに「十分間」（感謝,p８）であったという。その当時から山本の友人は「山本は信じ易い男だからだまされた」（感謝,p10）のだといったが，晩年の回顧でも「岡本君を偉人と信じて立ち上ったのは友人の言うように，それは私の軽信であったかとも思う」（感謝,p33）といいつつも，山本自身「岡本君は実際不世出の機才である」（感謝,p15）と評価しており，心底だまされたというような気持ちにはなっていないようである。

この結果，岡本は野村，岩本「二人の紹介によって，京阪神地方の主なる財界人に接近し，その…事業計画を披露して，大いに勧誘」（得庵,p372)した。山

本も「岡本米蔵君が亜米利加から帰って，阪地の財界を震撼させ」（感謝,p７）たとする。例えば藤田伝三郎の許には「富豪を見込で日に幾十となく攻寄する，強請的若くは哀訴的の寄付申込」があるも「慈善施与を好まず」[26]一切拒絶の方針であった。晩年藤田「翁は病中にても…静養を欠かれし」[27]ため，「医師より長時間の談話を禁」[28]じられていたにもかかわらず，「藤田伝三郎氏が病床へ呼んで岡本君を引見」（蔦葛５-19）したのも野村，岩本「両人名儀を以て…紹介の労」（蔦葛５-19）をとったためという。ケチな反面で藤田は「人を信ずること亦極めて厚く…一切を委任して毫も疑はず」[29]，「苟も公利公共の為とならば，毫も出金を惜まず，一言の下に快諾し，勧誘者をして却て面食はしむる」[30]一面があったと岩下清周は記している。おそらく藤田のこの特性を突いた岡本は「藤田組を勧誘して紐育付近に一エーカー二十弗内外の土地を一エーカー四十五弗の割合にて莫大なる地所を買入れしめた」(T６.７.６ 内報）とされる。岡本側の資料でも「故男爵藤田伝三郎氏の炯眼により…数百万坪を購入せり。是れ最初の投資家」（米蔵,p86）と特筆大書している。「財界人に紹介した…道義的責任」（得庵,p371)を感じた野村自身も「甚だ遺憾に思ひ，岡本の処置を憎んだ」（蔦葛５-19）としており，彼の伝記も野村「氏の生涯に於ける珍しい失敗の一つ」（得庵,p371)としている。

また岡本の「計画に提灯を持たなかった」（得庵,p372)野村も岡本から米国鉄鋼株を勧められ，親友の「岩本氏と相談して，岡本に日々紐育からスチール株の相場を大阪株式取引所へ打電せしむる」（得庵,p373)約束をした。２月25日「岩本，野村の協同計算」（蔦葛５-19）に基づく資金を受け取った岡本は27日勇躍米国へ向け出帆した。野村，岩本らはこの鉄鋼株取引では「多少得る処もありましたが…損徳無し」（蔦葛５-19）に終ったという。

明治44年３月『銀行通信録』に「紐育株式市場ニ就テ」を寄稿した。明治45年１月には８年間に現地紐育市で「親しく見聞せしところ」（地所，緒言）に

26）30）岩下清周『藤田翁言行録』大正２年，私家版,p104 ～５
27）28）岩下前掲書,p115
29）岩下前掲書,p109

基づき，東京の博文館から著書『紐育市内外の地所』（126頁）を出版した。ほぼ同じころ岩本，藤田ら内地の富豪や資本家の出資を得て，同書で提唱した方法の通り紐育土地建物の設立を開始したと推定される。同書の中で岡本米蔵は「紐育市の内外に存する…地所建物会社は…競ふて『エイカレッヂ』[31]を買収し…『ロット』に区画し…居宅建築者並びに放資者に卸売し，或は小売りするもの」（地所,p115)と説明している。そして同書の結論として「米国の州法の下に，株式会社を設立し，是れを全然自家の掌中にし，同会社をして，地所家屋を所有せしむる」（地所,p123)方法を日本人の投資家に提唱している。

周知の通り米国の「太平洋沿岸地方に於けるが如き熾烈なる排斥と理不尽なる圧迫とを被り…千九百十三年維爾遜大統領時代におなじく加州に於て発生せる土地所有権禁止問題」（発展,p444）など，西海岸では古くから日本人の土地所有が制限されていた。紐育日本人会が大正10年に編纂した『紐育日本人発展史』は在留邦人の不動産取得に関して次のように記述している。「紐育に於ける日本人の事業上の発展は顕著なるものあるに拘はらず，自ら土地を買収し家屋を建築して永住の計を樹つる者僅かに指を屈するに過ぎざるは一奇とすべし。惟ふに此主因は紐育州に於ける外人土地所有権の明確ならざりしが為めに定住的計画を為さんとせる者も心を安んじて投資を試むるの勇気なかりしことと，他面在留邦人の共通癖たる腰掛主義的思想の存在に起因すべく，既に団体としては日本倶楽部の如き，将た紐育日本人教会の如き完全に土地と家屋との所有権

31）社名にある Acreage『エイカレッヂ』（エーカー数，面積）は山林原野の売買単位の地積であるエイカー（約1,220坪）から，俗に山林原野，田圃のことをいう。（地所,p114)したがって，「郊外十マイル以内のところ」（平山,p168)にある現況が山林原野，田圃などの「安い土地」を意味している。帝国興信所は「藤田組に売り付けたる一エーカー（我が四反余）四十五弗の土地は原価二十弗内外なりといへば，之を邦価に換算して一坪三銭強を出でざるに鑑み，紐育の郊外に如何にお粗末なる土地の散在せるかを知るを得べし。成程之れなら岡本氏等が一坪八十八銭乃至二円八十五銭を以て新たに土地を購入すべく目論見を樹てたるも無理ならぬ次第」(T6.7.6 内報）と納得している。岡本が大正6年発起中の日米興業が「所有せんとする地所」（T6.3.22読売）も「排水の設備」がなく「低地の故を以て永く閑却せられたるメドウランド」（T6.3.22読売）であったが，昭和4年野村證券に入社した平山亮太郎（後の専務）もNew York Acreage Estate Companyの「その土地をみて参りましたが，沼地で草が生えた土地」（平山,p168)，すなわち社名の通り Acreageだったと証言する。

を保持し居れ共，個人として不動産を所有するは一部実業家以外其数極めて少し。千九百十九年に至り岩井商店紐育支店長高田孝雄氏は邦人店員をして慰安と便宜を得せしむるの目的を以てロング・アイランド地方に一邸を設けたるが，邦人社会に重要の地位を占むる者にして住宅を有するは紐育市リバーサイド・ドライブに於ける高峰博士，コンネクテカット州リバーサイドに於ける新井領一郎，村井保固二氏，武市に於ける高見豊彦，新城西州ウェストフキールドに於ける地主延之助氏，同州アレンハーストに於ける牛窪第二郎氏，アーリングトンに於ける草信竹治氏，紐育市郊外ニウロッシェルに於ける福島於菟氏の外数氏を算すべきのみ」（発展,p812～3)とある。明治40年には水谷という日本人がアトランティック市北ヴィルジニア街11番で不動産売買仲介業を営んでおり，「我が邦人の為め確実なる契約を結びて斯業に従事」（日本,p44）していた。またテキサス州では日本興農商会5,500,大西理平2,240,西原清東800エーカーなどの日本人地主が存在していた。

明治45（1912）年4月岡本は渡米して7年半数えで32才の時，独立して，「紐育市の郊外にして，米国主要鉄道の停車場に沿ひ，近き将来，住宅地，店舗地，又は工場地として都会化せざる可からざる運命を有する地所を，売買，経営，保管する」（洋行，巻末広告）ことを目的として資本金100ドル（約200万円）（再版,p130)の紐育土地建物会社New York Acreage Estate Companyを「紐育州法に基き設立登記」（洋行，巻末広告）し，社長に就任した。

岡本が『紐育市内外の地所』を著したところ，「当時内外の英字新聞，特に数欄を割きて其の研究を喜び，努力を讃」（洋行，巻末）したとしている。例えば『東京経済雑誌』は同書を「紐育に於ける富の基礎たる地所に関する過去及現在に於ける凡ての事項を簡明に叙述せるものにして甚だ興味に富む」[32]と書評した。

『紐育市内外の地所』を出版した岡本の意図は「紐育市の郊外の『エイカレッヂ』が減少する速度や，推して知るべし」（地所,p117)と，土地投機を煽り，「邦

32）明治45年2月10日『東京経済雑誌』,p266

人にして，紐育市内外の地所を所有することに於て，何等疑惑躊躇せざる可からざる理由更に無し」（地所,p123)という，紐育市内外の地所の所有の勧誘に他ならなかった。

大正４年１月外務省が紐育土地建物株式会社の調査を命じたのに対して紐育在留の中村巍総領事は以下のように報告した。「一，岡本米蔵氏は紐育市シンガー・ビルヂング[33]の一室に事務所を有し，二三の米人を使用して何事かを為しつつあり。一，当人の事業には何等の基礎を有するものなきが如し。従って日本人間には信用なし。一，当人は株式仲買人の手先となりて，日本人を諸種の投機事業に引き入れんと試みつつある噂あり。一，当人は又熾んに日米間を往復して何事かの運動を試み居れり。一，当人は明治四十四年藤田組を勧誘して紐育付近に一エーカー二十弗内外の土地を一エーカー四十五弗の割合にて莫大なる地所を買入れしめたり」(T６.７.６ 内報)

紐育市内外の地所の将来に着目した岡本自身もまず「富豪に説き」（T６.３.22読売），その後に方向転換して「シンディケイトを組織」（T６.３.22読売）したとする。それは野村の紹介を受けた「京阪神方面の重なる人々」（蔦葛５-19）が野村が「提灯を持ちませんものですから，一向成績が面白くありません」（蔦葛５-19）という不首尾のためであった。そこで岡本は富豪層から「会社員とか，学校の先生達の方へ，鉾を転じて」（蔦葛５-19）方針転換した。岡本が「広く全国の教育家に呼びかけて，紐育郊外の土地を買わせるという破天荒な仕事をやり出し」（感謝,p７)た結果として出資者開拓目的の「内地の出張所員は大抵小学教育者や，中等教育者」（米蔵,p65）を採用することとなった。

４年８月米国の所有権保険会社は紐育土地建物社長YONEZO OKAMOTO宛に所有権保険証券(Policy of Title Insurance) を発行した。（再版,p130)４年９月紐育土地建物は上記のような所有権者の名簿である『紐育地主名簿』を刊行した。

33）大正５年４月発行の『海外雄飛の模範的青年　岡本米蔵』グラビアにはWoolworth Building全景写真に「紐育土地建物株式会社」とのキャプションが付され，「右端の青年は岡本氏なり」との説明つきで同「会社内社長室」写真が掲げられている。本文では「副社長以下重役・社員其の他使用人に四十余名の米人と，二十名内外の日本人とを使用」（米蔵,p62）するとある。

この時の岡本の日本での住所は兵庫県武庫郡西郷町大石（横尾寿太郎と近隣）であったが，ほぼ同じころ岡本は米国ではThe Bronx,「リヴァヴァレイの遊園地」の西方，紐育北郊Yonkers,Colonial Heights（米蔵,p118)の「丘上に地を相し…ロングアイランド連峰を背にして，前に太平洋の浩涛を下瞰する処に，瀟洒にして優麗なる邸宅」（米蔵,p88)を構えた。同方向のNew Rochelleには福島於莵ら（発展,p812～3)も住んでいた。『海外雄飛の模範的青年　岡本米蔵』グラビアには「夕陽室」（米蔵,p88)と呼ぶ「岡本氏邸宅」，「巧緻善美を極む」（米蔵,p88)る「岡本氏邸宅内書斎」の写真が掲載されている。

5年1月1日『紐育市内外の地所』を再版した。初版との差異は，図版に「紐育土地建物株式会社New York Acreage Estate Companyが，紐育州法の下に，発行する所有権証明書の雛形」（再版,p134)を掲載した点である。同年1月長野県師範学校長内堀維文「新帝国の創建者・岡本米蔵君」が東京高等師範学校茗渓会発行の雑誌『教育』5年1月号の新年特別付録として掲載された。[34] 同書の書評は『萬朝報』『読売新聞』『大阪毎日』など各紙に掲載された。（米蔵，序）

東京商科大学教授の峰間信吉[35]によれば同書は品切れとなるほどの人気で，「教育社会は俄然として…青年鼓吹の一大標的を得たり…学徒の…印刷物を得んことを求むるや頗る急なり」（米蔵，序）として「予は内堀氏の編著を刊することを<岡本>氏に告げ…内諾を得た」（米蔵，序）として5年4月峰間信吉編『海外雄飛の模範的青年　岡本米蔵』を大正教育社から刊行した。この頃，岡本の「帰朝中は各地の学校，教育会等よりの請に応じて講演し，南船北馬，殆んど席の暖まる暇さへなき有様」（米蔵，広告）であったという。

むすびにかえて

以上本稿では岡本米蔵が紐育土地建物を創業するまでの個性あふれる前半生

34）国会図書館（請求番号339-691)の現本を撮影したマイクロ版には現物欠落のためか，当該特別付録は撮影されていない。

35）峰間信吉は大正14年に高柳淳之助から解雇された部下の大越信雄から依頼され，退職金の交渉を弁護士と交渉した。（深海泡浪『疑問の高柳淳之助』大正14年，文王社，p104)

を取り上げた。岡本が岩本栄之助や藤田伝三郎らの大物に取り入り，彼らをすっかり信用させたほど，学生時代から群を抜いて弁舌巧みであり，要慎堅固な野村徳七というリスク管理能力の高い傑物をも引きつけるほど，ある種独特の魅力もある特異な人物であったことはほぼ間違いない。しかし果して上述のように知的水準が高いと自認する教育界が「＜岡本＞君の事業を疑ふものは恐らくは神を疑ふものであらう」（内堀維文の言葉，米蔵p112）などと恰も神の啓示の如く過剰反応したほど，岡本が真に「海外雄飛の模範的青年」の称に相応しい人物なのか否かは，今後の姉妹編において順次明らかにする予定である。

（追記）校了時にライブドア事件に接し，岡本との共通性を痛感した。いずれ詳述したい。（1／25）